

〔報告〕

伝道する教会と説教

佐藤 司郎

はじめに——教会とは何か

説教の問題を考えるに当たって教会とは何かというところから始めます。教会とは、簡単にいえば、世界の救いのために人間に与えられた神の賜物です。その基礎はイエス・キリストにおける神の救いの業にあり、その生命の源は聖霊の現前と力にあります。世の救いのためにあるわけですから、教会のさまざまな働き、たとえば宣教、交わり、奉仕などの区別が昔からなされますが、福音をすべての被造物に伝えるという宣教の働きが最も重要であることはいうまでもありません。むろん宣教は教会全体に課せられた課題であり全体でなうものであって、牧師や長老、教会役員、あるいは伝道委員といった人たちだけのものではありません。宣教の重要性をある意味で決定的なものとして語っているのはペトロの手紙二、3章12節（「神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです」）です。神の国を「待つ」〔待ちつつ〕だけでなく「早めるように」〔急ぎつつ〕する働きが私どもに求められています。一人も減びないで皆が悔い改めるようにと忍耐しておられるのが神であるとすれば、宣教・伝道こそこの「早める」働きであり、神の忍耐に最もよく仕える道です。

ところで今日、教会のあり方を考える場合、この世との関わりを視野におくことが大切だと私は思っています。教会は世に遣わされています。祝祷は礼拝の終わりの合図ではなく一人ひとりが主の証人として世に派遣されていく始まりの合図です。世に対する教会の責任を強調した神学者の一人にカール・バルトがいます。彼は「世のための教会」という標語で表される「派遣の教会論」を展開しました（拙著『カール・バルトの教会論』）。「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（ヨハネ3・16）。もし私どもが神を愛するなら神の愛されたものを私どもも愛さなければならない。神の愛したもうた世を愛する以外のことが教会の在り方ではありません。世を愛する以外の仕方では神を愛することは、私どもにはできないのです。むろん世を愛するということは悪の力の支配する世に

ならうことではありません（ローマ 12・1）。そうではなくて、そのような世の救いのために御言葉を宣べ伝えることです。世のための教会とは第一に宣教し伝道する教会のことです。

説教と教会形成

それによって教会が建て上げられる礼拝が伝道する教会の中心であることはいうまでもありません。そしてその中心が、プロテスタント教会において説教にあることもいうまでもないことです。

皆さん方の教会で説教が礼拝の、また教会活動の中心を、ゆらぐことなく占めているでしょうか。説教がどのような意味で中心に位置しているか、それぞれ問うてよいと思います。最近感じるのは、礼拝の中にいろんな要素が持ち込まれて、その位置が結果的に軽くなっている、希薄になっていることです。日本の教会の礼拝は昔から説教を中心とした簡素で力強いものでした。この伝道地日本においてその伝道の始まりから伝道を自覚した礼拝が志向されてきたのです。

さらに説教が、すなわち教会に与えられた生ける神の言葉が、一週間の教会活動の中に生かされているでしょうか。週日の祈祷会でもう一度想起され、祈りの会をリードしているでしょうか。求道者の会（様々の形があるので一概にいえませんが）もまた説教を中心に運営されることはできないでしょうか。牧会も礼拝の説教からはじまります。説教を受けとめる会を教会によっては開いているところがあります。このような会に賛成でない人もいますが（たとえば竹森先生?）、説教を通して信仰と生活の問題を考え、説教のために祈る会として、私は十分意味があると思っています。そういう機会に説教者のために祈られるべきです。説教は礼拝で終わるのではない。そこから教会が形成されていくべき出発点です。

説教が教会においてそのような中心的位置を占めるようになるには信徒の理解と訓練が不可欠です。説教とはどういうものか、説教に対するいわば信徒の責任といったものの自覚を促すことは大切だと思います。説教に対する信徒の責任といっても、あれこれ口に出すということではありません。聞く責任です。聞くことによって、語られる言葉、教会の言葉に共に責任をもつ、それに基づいて伝道するということです。皆さんもきっと経験しておられるように、説教者というのは教会で「つくられていく」ものです。説教者のもつ務めを理解し、配慮し、そのために祈り、何より説教によく耳を傾け、これに期待する教

会の交わりの中で、説教者はそれに応えつつ育っていくものなのです。牧師一人だけがプライベート・タスクとして孤軍奮闘する課題ではありません。教会員に説教とは何か、理解していただくことが、もっともとはいいませんが、同じぐらい重要であるのはいうまでもありません。これも、説教を考える場合考慮すべき事柄です。「あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです」というローマの信徒に宛てて書いたパウロの言葉はここでも有効です（1・12）。牧師と信徒は説教を巡っても、多くの点で立場は違っているけれども、しかし互いに耳を傾け、互いに祈り励まし合うことによって、この時代における力ある教会の言葉、福音の言葉を共に責任的に練り上げていくべきだと私は思います。

説教黙想をしっかりと

当たり前のことですが、説教者が時間をかけて説教を準備する、とりわけ「説教黙想」をしっかりとすること、これがもっとも大切だと確信しています。

「説教黙想」は、竹森満佐一先生、加藤常昭先生らのご努力によって、日本でも1960年代から浸透し、雑誌『説教黙想アレテイア』などを通してみ皆さん方も親しんでおられることと思います。私個人も『説教者のための聖書講解』の時代からおそらく40編以上の説教黙想を書いて発表しています（拙稿「日本における説教黙想の確立とその展開」：『これからの日本の説教』2011年2月、キリスト新聞社、参照）。

周知のように「説教黙想」はドイツ教会闘争をになった告白教会の中でバルトの神の言葉の神学の影響のもとに生まれたものです。教会闘争というと、非常に政治的なことと皆さんお考えかも知れませんが、決してそうではありません。「教会が教会である」（バルメン神学宣言）ための戦いでした。ヒトラーがあたかも教会の主であるかのように干渉してきたとき教会と世界の主はキリストだと告白する戦い、つまり簡単にいえば説教の戦いでもあったのです。

もし誤解があれば、はじめに解いておきたいのは、「釈義」の成果を、「黙想」を通して、「説教」として展開するという時間的な段階論として考えるは正しくないということです。説教黙想運動の中心にいたG・アイヒホルツ（当時30歳。彼が編集の中心となって最初の説教黙想集『主よ、わが唇を開きたまえ』第一巻が1941年に刊行された）によれば、説教黙想が目指すのは、「釈義と説教が真実の意味で一つになる」ことでした。われわれの宣教の言葉はつねに、一方で「抽象性」の危険にさらされ、他方で「偽りの具体性」（今

日性)の危険にさらされています。神の言葉はすでにそれ自身具体的なのであって、われわれの例証(イラストレーション)によって現代化・具体化しなければならないというのではないのです。神の言葉の現実性がそのまま説教の言葉の現実性とならなければならない。宣教の「具体性」は神の言葉からその「贈物」として与えられます。「釈義と説教が真実の意味で一つになる」ための説教黙想は、アイヒホルツによれば、*explicatio*(説明)と*applicatio*(適用)との「絶えざる相互内在」的作業において遂行されます。すなわち、*explicatio*において*applicatio*を、反対に*applicatio*において*explicatio*をなしつつなされる「考察の道半ばのところ〔省察という中間〕」、これがアイヒホルツの、また最初の説教黙想集に結集した人びとの共通した説教黙想の課題理解です。釈義の段階で適用が問題であり、適用においても釈義が問題なのです。「真剣にテキストに取り組む者は思想の貧困を嘆くことはない」(ボンヘッファー)は私の座右の一句です。

まとめ —— ディスカッションのために

1. 教会観を巡って —— 今日の日本の教会がますます内向きになり、かつ教条的になりつつあるような感じがして危惧しています。キリストの王的支配とか、世のための教会とか先人の切り開いた神学的な線と方向を改めて学ぶ必要があると思います。総じて二元論的思考の克服が依然として日本の教会の一つの課題であるように思いますが、どうでしょうか。

2. 伝道を巡って —— ここにも救われた人と救われていない人等々の過剰な二元論が今日見られます。証人としてのキリスト者、証しとしての伝道のもつ真理契機をもう少し大切にしたいのです。たとえば「われわれの先達はたんに教会のために伝道したのではない、われわれの国の救いのために伝道した、キリストの福音なくして世界の救いはないと確信した」(加藤常昭, 宣教 150 年記念式典講演)というような言葉をどう聞き、どう理解すべきでしょうか。

3. 説教を巡って —— 説教をするより聞く機会の多い私自身の現状の中で、「説明」の説教が多いような気がします。その上聖書の根拠はどこだろうというような不明確な神学的認識が入り込んできている場合も少なくありません。ともかくもっともっと時間をかけて説教に打ち込むこと、これが、教会の牧師にも、キリスト教教育の場に遣わされているわれわれにも求められていると痛感しています。